

イ いつも遊んでいる友達は何人位か
 ウ 子どもを甘やかしている人がいるか
 エ 子どもにきびしい人がいるか
 オ 家族そろって食事をするか
 カ 近所と親しくつきあっているか
 キ 隣近所にくらべて人の出入が多いか
 ク テレビのよい番組はみせているか
 ケ 子どもの持物を整理する場所があるか
 また、両群の間で有意の差が認められたのはつぎの項目であった。
 (○)は5%以下の危険率で◎は1%以下の危険率で有意なものを示す)

ア おこづかいを毎日与えているか(○)

与えていない方が過成熟児に多い

イ 家庭での躰はどうしているか(◎)

きびしく躰けているかと思われている方が過成熟児に多い

ウ 近所の友達と遊ばせますか(○)

えらんで遊ばせる方が過成熟児に多い

(4) 離乳期および初歩期との関係について

離乳完了の時期、歩きはじめの時期を調査し、比較してみると過

成熟児の方が早い。

(5) 結論

① 全体的にみて都会地では社会性の発達が進んでいるように思われる。

② 親の養育態度が幼児の社会性発達に影響することが明らかになり、特に親の盲従的態度、拒否的態度が社会性発達によくない影響をおよぼすようである。

③ 二〇項目からなる家庭環境調査を行ない社会性発達との関連性をみたが、親の養育態度を示すと思われる3項目において関連性がみられただけで、その他の項目についてはみられなかった。

④ 親の養育態度が幼児の社会性の発達に影響することが明らかになった以上、幼児の社会性の円満な発達をすすめるためには、園におけるよい指導が必要なることはもちろんだが、両親の協力を得ることも大切であり、家庭においてよい養育態度をとってもらおう両親教育をおこなうことも必要であろう。

⑤ 特に社会性の未発達児には、両親の理解、協力を得ることが必要であるが、過成熟児にも適切な指導が必要であろう。

(大会抄録91~94頁)

社会性指導の問題 (第二報)

(社会的成熟度と社会距離点との関係について)

名古屋市立保育短期大学 成 田 錠 一

上名古屋保育園 石 田 妙 子

研究の方向

社会性指導の問題を考えるに当って我々は、十三回大会発表のごとく社会性をその発達の側面と教育的側面とに分けて考えることにした。そして前者は社会能力検査とか成熟度尺度によって客観的に総合的にとらえうると考えた。また後者は正しい指導目標への到達の度合によりとらえた。目標への到達度は代表的な保育場面を三つ選び、それぞれサブゴールを用意し、五段階評定により評定しその

合計得点でもって表現した。この両者の関係について考察したのが第一報であったが、第二報では前回の問題点の考察に重点を置いてステップを進めたのである。即ち前回の問題点というのは、乳達の側面では高いレベルを持ちながら教育的側面即ち各目標への到達度が低いレベルを示すものが存在するということである。勿論全体としては両者の関係は相関関係が認められるけれども。そこで今回はこの問題点を手がかりにして研究を進めることにした。

先ずこの問題点を示す幼児は、正しい社会性伸長の方向即ち、無責任から責任へとか、自己中心から友情へとか、自立から協力へとかいった内容をもつと思われる、よりよき社会への適応という正方向からの傾斜をたどったものと考え、これに対し先ず研究ステップとしては次の如く作業仮説をたててみた。第一に、従来の社会性指導の目標、方向が、特に保育施設における個々の具体的指導場面における指導目標（第一報で我々の研究の中にとり入れた）が、その集団保育という場と、その収容児の発達段階からして、余りにも高次の指導目標内容をもちすぎているのではないかということ。例えば責任とか、相手の気持を受け入れるとか、グループ構成といった領域においてである。この点については社会性の発達レベルが低い幼児についても同様のことが当てはまるであろう。

第二に、このような問題性—発達の正方向からの傾斜は、人間関係の技術か原始的スタイルをたどっているものと考え、これもすべてての幼児に当てはまるとも考えられるが、特に対象児については、その環境的、個人的指導という点にのみ保育者は手を加えるのみで、第一の如き根本的な問題としてとらえなくてもよいことかどうか。

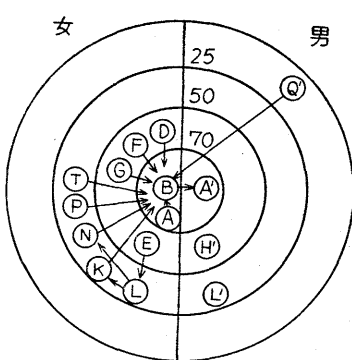
第三には個人の発達の側面の指導として使用した社会的成熟度そのものに問題がありはしまいかという点である。即ち第一報、第二

報共にその研究方法として総合的な社会性の発達の側面をとらえるのに、K式改訂ヴァインランド社会成熟度尺度を使用して得点化した、が、現実の幼児理解指導に参考とする場合の利用限界という問題である。

以上の如き研究仮説をもつて研究ステップを進めるのであるが今回は、前回と同じ方法により社会成熟度を算出し、それと間接的に社会的適応性の指標としてソシオメトリーによって計算された社会距離点、社会図式的得点を計算し、両者の関係を考察することによって前記仮説(三)を検討する。なおソシオメトリーテクニックとしてその信頼性と妥当性の関係から Picture Sociometric Test を用いた。対象児は5〜6歳児三九名である。結果は抄録に示した。

以上の如く成熟度(SQ)と社会距離点及び社会図式得点(算出方法は抄録参照)との関係は $r=0.37$ と 0.30 であったがそれぞれをPRによって四段階に分けそれぞれのグループのSQの平均を算出してみたところ上記の表の如くなった。このことから両者とSQの間の関係は明らかにされた。

即ち成熟度は充分その意味をになっていると考えてよいだろう。しかしここでまた、右の標的マトリックスとしてとり出したB児(高SQで高社会距離点をもつもの)とL児(高SQで低い社会距離点をもつもの)の如きケースの存在することが明らかとなった。この点を充分ふまえた上



で次の研究方向としては仮説(一)を発達段階を充分考えた上で、いたずらに目標内容の高次性をのぞまず、地についた目標に再構成した上で第一報と同じ方法により検討したい。(大会抄録94-97頁)

園児の交友関係の変化とその分析

(私立幼稚園における二年間の観察より)

麻布みこころ幼稚園 赤木志津子

調査目的 園児の交友関係がどのような環境に影響されるものであり、また保育中の環境を人為的に変えることによって、交友関係にいかなる変化が起るかを調べるために、交友関係の調査を質問紙によって試みた。まず第一年目では主に交友範囲を知るために無制限選択を、第二年目では主として交友関係の内容を知るために制限選択をさせてみた。

調査対象 男児二五名 女児二〇名 計四五名

通園は広範囲にわたって交通機関を利用する遠距離通園児は四二%である。なおこの調査は一級全員に行なったが、途中退園、入園のため異動のあった子どもについては調査対象から除外した。

調査方法 期間 昭和三四年四月、昭和三六年三月

各学期末に交友調査を行ない、その結果を参考にして、選択できなかった子ども、選択されなかった子どもを中心に毎学期始めに整列の順序とテーブルの座り方を換えた。

第一年目の調査結果

一学期に選択できなかった子どもは九名で、そのうち八名が二学

期には選択できるようになった。その内容はテーブル、整列の影響によるものが殆どである。二学期にも選択できなかった一名は三学期になって四名選択できるようになった。そこにもやはりテーブルの影響がみられた。

なお、選択されなかった子どもは次の五つに分類され得る。

- 1 欠席が非常に多い子ども
- 2 遅刻の多い子ども
- 3 遊びに加われない子ども
- 4 乱暴な子ども
- 5 入園当初母親から離れられなかった子ども

これらの子どもは家庭は過保護の場合か、放任の場合のいずれかに多くみられた。上記一から四までに該当する子どもは、二年目になっても比較的选择されていない。

第一年目、第二年目の交友関係の分析

近隣とは通園の往復時は勿論、帰宅後も接触の機会を持っている

